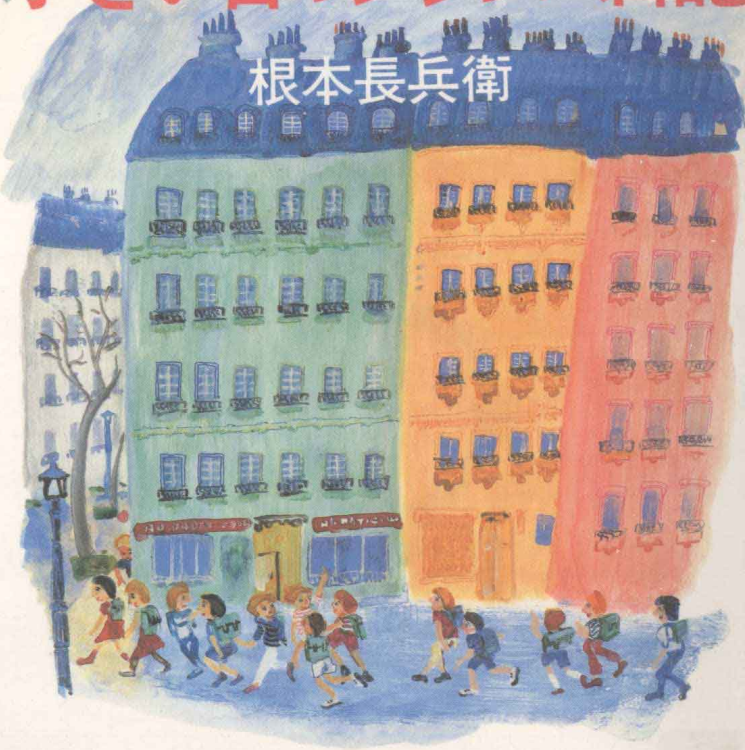
小さい目のフランス日記

根本長兵衛



朝日文庫

根本長兵衛(ねもと・ちょうべい)
1932年東京生まれ。61年朱日新聞社に入り，
学芸部，外報部などを経てパリ支局員となる。
以後，パリ支局長，「朝日ジャーナル」副編
集長，ローマ支局長。82年から東京本社編集
委員（ヨーロッパ駐在)。

小さい目のフランス日記　朝日文庫

昭和59年6月20日　第1刷発行　定価380円

著　者　根本長兵衛

発行者　初山有恒
印刷製本　凸版印刷株式会社
発行所　朝日新聞社
〒104　東京都中央区築地5-3-2
電話　03(545)0131（代表）
編集＝図書編集室　販売＝出版販売部
振替　東京0-1730

©Chobei Nemoto 1984 Printed in Japan

ISBN4-02-260277-0

小さい目のフランス日記

根本長兵衛

表紙・扉　伊藤鐵治

目次

小さい目のフランス日記

突然の〝移植〟 9
教育討論会 16
セ・パ・マ・フォート 23
セリジエ先生 31
古い教科書 37
質実剛健 44
暗誦 51
個性を育てる 59
人間以前 67
招待状 74
課外活動 81
住み込み校長 88

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

成績〝体温表〟 95
さばさば終業式 103
コロニー生活 111
フローラと二千キロ 118
「涙の村」のクリスマス 125
小さな島国根性 133

私のフランス・ノート

私のフランス・ノート
「ばらばら」と「ねばり」 143
フランス病と日本病 150
「衣食住」と「食住衣」 157
フランス人は不器用？ 163
日本にはヴァカンスがない 171
気になることが違う話 179

自由を愛する国　187
トロワ事件――犯罪と個人主義　194
フランス人にも〝表と裏〟　201
「すべきこと」と「したいこと」　208
パリ・メモ
距離感　215
生活のテンポ　223
異質と均質　231
左右対称　239
新旧論争　247
フランスのサラリーマン生活　255
あとがき

挿画／山田　紳
写真／根本　長兵衛
鹿子木　脩（＊印）

小さい目のフランス日記

突然の〝移植〟

ABC（アーベーセー）も知らぬ子どもたちが、自宅と目と鼻のソーセイ大通りのフランス公立小学校に通いだしたのは、一九七二年九月。当時、パリには日本人学校はまだなかった。あれから五年余りの歳月が流れた。だが、この初登校の朝の光景はいまでも、つい昨日の出来事のような鮮やかさでよみがえってくる。

マロニエの黄色い落ち葉を踏んで、九歳と五歳の息子と娘が緊張し切った顔をして、小学校と幼稚園のグリーユ（鉄柵）の門をくぐった。

息子は、日本では小学三年生だった。だが、まず言葉に慣れるためにオンジエーム（第十一学年＝初等教育準備課程、日本の小学一年に相当）からやり直すことになった。年齢の割に大柄だったから、六、七歳の一年坊主の同級生より頭一つ大きい図体を持てあまし、照れくさそうな表情を浮かべる。しかし、日本のランドセルと違って横長の大きなカルタブルを背負った身体の方は、緊張と不安でこちこち、どうしていいのか分からず、ぎごちない動きを繰り返してい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong

た。

年齢相応の幼稚園の最終学年に入る娘の方は、カルタ―ブルなしの手ぶら。こちらも、はしゃぐ同じ年ごろの子どもたちからぽつんと離れ、グリーユ越しに、帰りかける両親の方を、不安ではち切れそうな目でみつめていた……。

平手打ちくわせる先生

教育と環境の激変にどうなることかと心配したが、子どもたちはごく自然に青い目の学校生活に溶け込んだ。一年生からやり直しスタートした息子は、途中で三度ソーテ・ラ・クラス〈飛び級〉して年相応の学年に追いつき、九カ月ばかりだったが、リセ（中・高等学校）の一年生も経験した。娘の方は幼稚園から小学三年生まで、初等教育の前半をフランスで送った。どの国の子どもも、環境に慣れるのは早い。ことに日本人子弟の適応力は抜群。外国で暮らす大人の日本人がいつまでもその社会に溶け込めずにいるのに比べて、子どもたちは半年もすればすっかり慣れてしまい、学業もクラスの上位になる。「日本人の大人と子どもは、別人種みたいに違うね」と、友人のフランス人に皮肉られたことさえある。

といっても、習慣・文化の全く違う外国の学校に突然〝移植〟された子どもたちの戸惑い、驚きは、並大抵ではなかったようだ。

教室ではセンセイ君主制よ

息子と娘はまず、女の先生でも児童の耳をひっぱって立たせたり、平気で子どもの頬を平手打ちしたりするのにびっくり。レクレアシオン（休み時間）中でも、シュールベイヤンと呼ばれる監督当番の先生の目がひかっている。校庭で子ども同士のちょっとしたいさかいが起こると、さっそくピピーと呼子笛を鳴らす。ピピーと鳴ったら、遊んでいてもその場で不動の姿勢を取らなければならない。

フランスでは、教室はわ

いわいがやがやする場所ではなくて、静粛な勉強の場所なのだ。先生は自分たちの「仲間」ではなくて、クラスのきびしい主人だということを次々に発見して、子どもたちは目を丸くした。

街でも、子どもは決して王様ではない。デパートの玩具売り場で、三、四歳の幼女がぐずっているのを見た。すると、母親が子どもの手を赤くなるほどつねりあげ、嗚咽を抑えようとする彼女の頬を平手打ちした。この光景を目撃した私の娘は、びくっとして、自分が叩かれでもしたように思わず頬をゆがめた。親だけではない。売り子さんの方も遠慮会釈なく「触っちゃだめ！」と、おっかない顔で子どもをどなりつける。

こんなこともあったという。ヴァカンスで、クラスのフランス人の子どもといっしょに、息子が初めて旅行に出かけたときのことだ。就寝時間になって息子がパジャマに着がえようとすると、突然、同室の子がげらげら笑い出し、飛び出して仲間を大勢連れて戻ってきた。息子には、何がおかしいのかさっぱり分からない。原因はパンツ。息子が、パンツをはいたままパジャマのズボンをはこうとしたら、皆がパンツを指さしてはやし立てた。寝るときはパンツを脱ぐよう、ことに低学年の場合、先生がきびしく指導する。理由は分かったが、息子は慣れないフルチン・スタイルはごめんと、夜もパンツをはく習慣を守り通したという。

親の方も「びっくり」の種には事欠かなかった。

フランスに来た翌年の六月、初めて終業式に出席した。フランスの学制では、新学期はヴァ

カンス明けの九月で、終業式は学年末の六月に行われる。校門のグリーユを入ると、低学年の子がタイプ印刷の姓名リストのようなものを買えという。一フラン（約六十円）出して見ると、小学一年のオンジエームから初等教育最終学年のセッチエーム（第七学年）まで、全クラスの子どもの名前が並んでいる。この成績順のリストを見れば、どの子がクラスの一番か、どの子がびりか、一目瞭然。できの悪い子は終業式に出るのがつらいだろうな、と内心同情した。しかし、リストでクラスのどんじりの子も、別に恥ずかしがっている様子もなく、ごくふつうに振る舞っている。

終業式のハイライトは、賞品授与式である。一年生から、各クラスのトップと学年成績「優等」の評価をもらった四、五人の子どもが壇上で表彰され、賞品の本をもらう。トップがいちばん分厚い立派な本。二番、三番と、本が薄くなっていくのである。成績の格差を公表することは子どもの精神を歪めるという〝超平等主義〟がたてまえの日本の小学校では、想像もできない光景だった。表彰のたびごとに、父母やほかの子どもたちが拍手する。厳密な子どもの格づけ公表の機会なのに、笑い声も起こって意外にのどかな雰囲気だ。この終業式で学校を去って行く卒業生たちも、陽気でさばさばしていて、日本の卒業式のようなしんみりした調子は全く感じられなかった。

家庭教師はまれ

フランスの小学校では、できるものはできる、と点数に基づくはっきりした子どもの格づけが行われている。さぞかし家庭教師と塾が大繁盛、とわれわれ日本人は早呑み込みしがちだが、父兄のひとりに聞くと、「家庭教師？　どうして」と反問された。重ねて聞くと、「そういえば、落第しそうな子をもつ親が、あわてて家庭教師をやとったという話を聞いたことがある」という返事だった。

フランスでは、成績がよければ〈飛び級〉する。したがって、できの悪い子が〈原級にとどまる〉こともあるわけだ。家庭教師はまれで、落第しそうな子につくのであって、できる子に家庭教師がなぜ必要なのか、とフランス人は不思議そうな顔をするのである。

どうして日本とフランスでは教育のあり方がこうも違うのか、とまず興味を覚えた。

年間二十万人を超える日本人旅行者のパリ訪問、週刊誌、女性雑誌の再三のパリ特集、ジャーナリズムの多彩なフランス報道にもかかわらず、フランスの本当の姿、日常のフランス人のものの考え方、生き方は、まだ日本にほとんど知られていない、とかねがね考えていた。日本の皮相なフランス・ブームにもかかわらず、フランスは依然、われわれ日本人には未知なところの多い「もっと知っていい国」の一つなのではないか、と思ったりもした。

ところが、子どもが何気なく語る学校生活の報告を聞いていると、大学教育まで日本で育った私には全く想像もできない出来事が、ふんだんに出てくる。「日本と全く異質な文化・社会を作り出すフランス人は、なるほど、こんな具合に教育され、しつけられるのか」と驚かされることもたびたびあった。

「外国を知るには、その国の教育を理解するのが一番」という言葉もある。フランスの「生きた現実」の一端をご紹介できたらと、あえてわが家の〝小さい目〟が見たフランスの学校生活のエピソードを、お伝えしてみることにした次第である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertong